

ブドウの高接更新について

佐藤 孝宣・高瀬 紘一・菊地 辰男*

(山形県立園芸試験場・*長井農業改良普及所)

Top-Working Technique of Grapes

Takanobu SATO, Koichi TAKASE and Tatuo KIKUCHI*

(Yamagata Horticultural Experiment Station・)

(*Nagai Agricultural Extension Service Station)

1 はしがき

山形県におけるブドウの品種構成は、デラウェアが大部分でブドウ全体の82%を占めている。しかし、最近デラウェアの生産過剰による価格の低迷や、消費者の嗜好の変化などから、収益性の高い大粒系品種への関心が高まってきた。県においては、昭和65年を目標に品種構成を、デラウェアを現在の82%から70%まで下げ、大粒系品種を4%から17%に増やす計画である。

一方、デラウェアの改植による品種更新は、多くの労力を必要とし、また、植栽から成園までの数年間は収益減となる。特に、大粒種は幼木期に生育がおお盛すぎるため凍寒害などの障害をうけやすく、成木化までの管理も困難である。

そこで、収益性を落とさず、しかも、効率的な品種更新法として緑枝接ぎによる高接更新の実用性について検討したので報告する。

2 試験方法

試験 1 緑枝接ぎの時期

場内15年生デラウェア2樹を中間台木(台木3309)とし穂品種に巨峰を供試した。接木の時期は、5月29日、6月5日、6月10日、6月17日、6月25日に行い、接木の方法は、図1のように穂はクサビ形に切り、中間台に切り込み

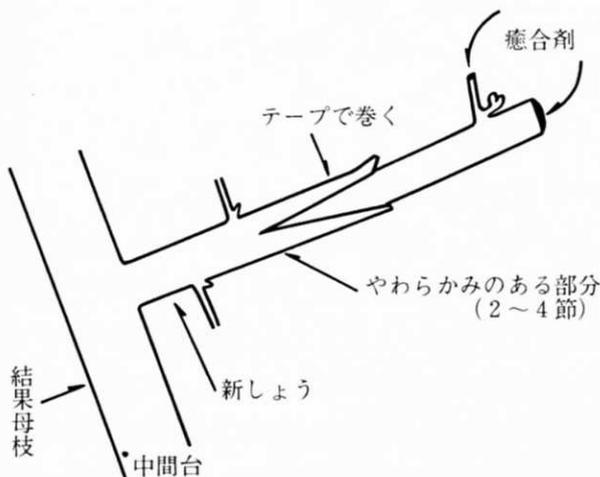


図1 緑枝接ぎの方法

を入れ割り接ぎによる一挙更新とした。

処理は主枝単位に行い2反復とし、落葉期に活着率、新しゅう長、枝の登熟などについて調査した。

試験 2 高接更新の方法

場内16年生デラウェアを中間台木(台木3309)とし、穂品種に巨峰を供試し、一挙更新と漸進更新について検討した。一挙更新は、更新を一年で一挙に行い、漸進更新は、結果母枝数の約半数を更新した。

接木の時期は、6月3~8日に行い、接木の方法、調査方法は、試験1に準じた。処理は1樹1区2反復とした。

試験 3 高接樹の翌年の生育、果実品質、収量

供試樹は試験1で高接した樹、また高接樹の対照品種として、同樹齢のイブリット・フラン台巨峰を1樹供試し、発芽の程度、摘粒前の有核果数、新しゅう長、果実品質について調査した。

発芽の程度は発芽15日後に30本の結果母枝の全芽について、0(枯死)、1(生きているが発芽せず)、2(発芽しているが展葉せず)、3(展葉2枚以上)、4(展葉3枚以上)に区分し表示した。摘粒前の有核果数、果実品質は、結果母枝の先端から2番目の新しゅうの30果房について調査した。着色はカラーチャートの数値で示し、果粉は1(不良)、3(中)、5(良)、サビの程度は1(少)、3(中)、5(多)の指数で表示した。

3 試験結果

試験 1 緑枝接ぎの時期

緑枝接ぎの活着率は、5月下旬から6月下旬の各時期と

表1 緑枝接ぎの時期と活着状況 (1980年)

項目	中間台の育生		接木本数(本)	活着本数(本)	活着率(%)	新しゅう長(cm)	登熟長(cm)	登熟率(%)
	新しゅう長(cm)	葉数(枚)						
5月29日	28.8	8.5	69.0	43.0	62.9	132.7	66.4	50.2
6月5日	45.1	11.5	143.5	97.0	67.8	91.0	24.0	26.4
6月10日	68.0	13.7	60.5	47.5	76.9	57.7	12.4	21.5
6月17日	93.0	17.8	52.0	34.5	67.4	38.7	1.4	2.6
6月25日	110.5	19.6	41.0	33.5	81.3	29.0	0	0

も60%以上であった。接木時期と新しょうの生育との関係は、早い時期に接いだものが伸長、登熟ともよく、遅くなると活着後の新しょうの生育が劣り、登熟も不十分であった。したがって、緑枝接ぎの時期は5月下旬から6月上旬頃が適期であり、その時期の中間台(デラウェア)の新しょう長は30~50cm、展葉数は8~12枚であった。

試験 2 高接更新の方法

活着率は一挙更新が75%、漸進更新は5%であった。活着後の新しょうの生育は、一挙更新で良かったが、漸進更新では伸びも悪く、登熟長もほとんど得られなかった。漸進更新の活着率が悪かった原因は、中間台の新しょうの生育に養分が集中したためと推察される。

表2 更新方法と活着状況 (1981年)

項目 更新方法	接木 本数 (本)	活着 本数 (本)	活着率 (%)	新しょう長 (cm)	登熟長 (cm)	登熟率 (%)
一挙更新	157.0	118.0	75.7	282.6	176.6	61.6
漸進更新	101.5	5.5	5.9	9.8	1.5	10.0

表3 高接樹の翌年の生育, 結実 (1981年)

項目 区	発芽の程度 (%)					3 + 4	摘有 粒核 前果 の数 (個)	新しょう長	
	0	1	2	3	4			満 開 期 (cm)	落 葉 期 (cm)
高接樹	17.6	15.1	31.0	25.1	11.4	36.5	14.2	81	128
対照樹	17.1	3.8	11.4	32.4	35.2	67.6	11.7	71	105

試験 3 高接樹の翌年の生育, 果実品質, 収量
高接樹の翌年の発芽ぞろいは、対照区の巨峰に比較して悪く、新しょうの生育もおおう盛であったが、結実、果実の品質は対照区の巨峰と変わりなかった。

高接樹の翌年の収量は、1樹当たり28.3kgで同じ16年生樹の対照巨峰の1/2程度であった。

表4 高接樹の翌年の果実品質, 収量 (1981年)

項目 区	果 房 重 (g)	着 (カ ラ ー チ ャ ー ト 色)	着 粒 数 (個)	一 粒 重 (g)	屈 折 計 示 度 (%)	滴 定 酸 度 (%)	果 粉	サ ビ の 程 度	収 量 (kg)
高接樹	142	10.2	14.8	9.4	17.5	0.49	5.0	1.4	28.3
対照樹	137	9.3	13.3	10.0	18.4	0.49	4.6	1.3	70.8

4 ま と め

デラウェアを中間台木として、穂品種は巨峰を供試し、緑枝接ぎによる高接更新を行い、次のような結果を得た。

- (1) 緑枝接ぎの適期は、5月下旬から6月上旬であった。
- (2) 更新方法による活着率は、一挙更新が高く、漸進更新は低かった。
- (3) 高接樹の翌年の発芽ぞろいは、対照区の巨峰に比較して悪く、新しょうの生育はややおう盛であるが、結実、果実の品質は対照区の巨峰とほとんど変わりなかった。
- (4) 高接樹の翌年の収量は、対照区の巨峰の約1/2程度であった。